「井戸」　千葉省三

芦原の小学校は、丘の上にあったから、井戸がずいぶん深かった。水の面まで、十間ちかくあると云った。

ふたがないので、お掃除の水を汲むたんびに、だれでもちょっとのぞいて見た。大きな遠目鏡でものぞくように、赤土の壁が、丸い筒になって、うす暗い地の底に消えこんでいた。

そして、はるか下の方に、小さい、円い、お盆のような水が、つめたく光って見えていた。

丑は、三日目ごとにまわってくる、掃除当番が、いやでいやでしようがなかった。そのたんびに、水汲みをさせられるからだ。丑は、力が強いかわりに、不器用な子どもだった。

丑のふいた廊下は、しまになって、ちっともきれいに光らないし、丑の並べた机や椅子はふしぎなほど、きっとゆがんでいた。

丑のやったお掃除のあとは、見まわりにきた先生に、いつもやり直しをさせられた。それで、ほかの当番がいやがって、とうとう丑を水汲み専門の役目にしてしまったのだ。

はじめの二三ばいは、いせいよく、車井戸のつるべをくりおろして行くが、五はい六ぱいとなると、息がきれて、腕がしびれて、一つ汲むのに、幾度も中休みしなければならなかった。

「丑、なんしてんだ。井戸んなかさ、鼻汁たらすんじゃねえぞ。」

こんなことをいいいい、ほかの当番は、からのバケツを放りだして、丑の汲んだバケツを運んで行った。

丑は、たれかかった鼻汁を袖口でひっこすって、フウとためいきをついて、さもたいぎそうに、またガラガラとつるべをくりおろすのだった。

長い梅雨が、そろそろ晴れかかって、学校の裏の松林では、かえりたてのあぶらぜみがなきはじめた。そのころのある日、だれかが井戸のなかに、何か落っこってるといいだした。

「しゃっぽみてえだな。」

「おら、木の根っこだと思うな。」

「猫っ子かもしんね。」

「猫っ子よりゃおっきいから、犬だんべ。」
よく、眼をこらしてのぞいて見ると、なるほど、すみっこの、赤土の壁のきわに、なにかうすぐろいかたまりが浮いている。
「この水ぁ、はあ飲めねえぞ。」
「おら、知んねで、けさものんだんだ。きびわりいなあ。」
みんな井戸のまわりにたかって、ガヤガヤやっていた。
そこへ、先生が出てきた。
先生も、のぞいて見たが、何だかはっきりわからないらしかった。
近くには井戸がないし、悪いものだったら、少しも早くだしてしまわなければならなかった。
先生は、しばらくのぞいてから、まわりに集まっている生徒の方をふりむいて、
「だれか、はいって見るもんはないか。」
といった。
みんな、顔を見合わせてだまっていた。
「つるべさ、しっかりつかまって行けば、あぶないことはない。そろそろおろしてやっかんな。」
先生は、また、そう相談するようにいって、みんなを見まわした。
すると、ひとりが、
「先生！丑がいいや！」
とさけんだ。
「そだ、丑がいい。」
とまたひとりいった。
「丑あ、こないだ、家の井戸ざらいっときも、中さはいったんだもん。」
丑は、みんなのうしろの方に立っていたが、背が高いので、青鼻汁をたらした、まののびた顔だけが、みんなの上に出ていた。
先生の眼が、丑の顔へ向くと、丑はあわてて横をむいて、
「おら、やだよ！」
とつぶやいた。
けれど、だれにも聞こえなかった。先生にも、むろん聞こえなかった。
「そんじゃ、丑松に、ひとつ勇気をだして、はいってもらうとするかな。」

先生は、うす笑いをしながら、ジッと丑を見つめていった。
「ホラ、お前がへえんだと。したくしろよ、丑！」
「はやく、先生っとこさいげよ。」
まわりにいた子どもは、ぐずぐずしている丑をつかまえて、むりやり前へおし出した。
丑は、何かいいたげに、口を動かしていたが、とうとう何も云わなかった。
先生は、丑の着物をぬがせて、運動シャツ一枚にした。ほかの子も、帯をしめてやったり、ボタンをとめてやったりした。
先生がポケットから鼻紙を出して、丑に、
「鼻汁をかめ！」
と渡したので、みんなクスクス笑った。
つるべのなわに、太い麻なわがもう一本むすびつけられた。先生のさしずで、大きい子どもたちは、一列になってそれにつかまった。
まもなく、丑は、寒そうな顔をして、井戸側に上って、先生に助けられて、つるべにまたがった。
「しっかりつかまっているんだぞ。いいか、いいか。」
先生は念をおして手をはなした。
つるべは、宙に浮いて、それから、そろそろ井戸の中におりはじめた。
丑の、頭がかくれて、すがっている手頸がかくれて、とうとう麻なわだけになった。
麻なわが、こまかくふるえながらさがって行った。

丑は、二間おり、三間おりて行った。
あたりは、へんにうすらつめたくて、シーンとしていた。
先生だの、みんなの声が、遠いところからひびいてくるようだった。
丑は、だんだん大たんになってきた。
上を見上げると、ポッカリと、おてんとうさまのように円い、明るい空が見えて、そこから、三つ四つ、小さい顔がのぞいていた。
つるべは、まだ水へ届かなかった。ゆるゆると下へおりて行った。
そして、上の円い空は、ずんずんちいさくなつて行った。
丑は、なんだか、じぶんが下へおりるのではなくて、高いところへあがって行くのだというような気がしてきた。

「やつら、くやしけら、きて見ろ！いばったって、ここまでこられめが！やあい！」
丑は、そう心の中でどなっていた。
ピシャリと、つるべが水にふれた。
底についたのだ。
丑は、ハッとして、
「よおし！」
と大声でどなった。声は、うつろの壁にひびいて、ゆかいそうに上へ消えて行った。
手をのばして、落ちているものを引きよせて見ると、それは、つぶれた古いフットボールの皮だった。
「なんだ！何がおっこちてたんだ！」
上からだれかきいた。
「フン。」
丑は鼻の先で笑って、口に出してつぶやいた。
「知りたけら、自分でおりて来て見っといいや！」
つづいて、先生の声が聞こえた。
「丑松！なんだった……」
「死んだねこっ子でやんす！」
丑は、いじ悪くこういった。
「そりゃいかん！早く、つるべっ中さ入れて引きあげろ。」
「きたねえから、おら、やだなあ！」
丑は、さもほんとらしく、こういって手をひっこませた。
「せっかくおりたんじゃないか。がまんして、持ってこう！いいか！」
先生が、たのむようにまたいった。
「猫っ子だと！」
「どうして、また落っこったんべ。」
「きっと、高等科の生徒が、ぶちこんだんかもしんねな！」
「くさってんべな、きっと！」
井戸端で話す、そんな声がきれぎれに聞こえてきた。
丑は、ニヤニヤ笑って、フットボールの皮をきたなそうにつまみあげると、それを足の下のつるべにぶちこんだ。

つなは、またそろそろひき上げられた。

丑は、近づいてくる頭の上の円い光を見上げながら、口笛をふきふき上って行った。